

2022年9月の大気大循環と世界の天候

大気大循環

500hPa 高度をみると、北半球では極渦の中心がシベリア側にずれ、北極付近で正偏差、シベリア付近で負偏差となった。また、北米～北大西洋～中央アジアで波列パターンとなり、グリーンランド南部付近で正偏差、ヨーロッパ東部付近で負偏差となった。北日本付近～その東海上でも正偏差となった。200hPa 風速をみると、北米東部の偏西風は平年と比べて弱かった。北太平洋の偏西風は平年の位置と比べて北寄りを流れた。ユーラシア大陸北部で寒帯前線ジェット気流が明瞭となった。海面気圧をみると、北大西洋北部～北極海で正偏差、中央シベリア～北米北西部、日本の南海上で負偏差となった。北太平洋の北緯40度帯でも正偏差となり、太平洋高気圧の北への張り出しが強かった。850hPa 気温をみると、北米北部～グリーンランド周辺、中央アジア付近～日本の東海上で高温偏差、ヨーロッパ東部～中央シベリアで低温偏差となった。

熱帯の対流活動は、平年と比べて、インド洋熱帯域の南東部～インドネシア付近、北西太平洋の北緯20～25度帯で活発、インド洋赤道域の中部、西部太平洋赤道域で不活発だった。赤道季節内振動に伴う対流活発な位相の東進は、月を通して不明瞭だった。対流圏上層では、太平洋熱帯域の東部～インド洋熱帯域の中部で南北半球対の高気圧性循環偏差、太平洋熱帯域の日付変更線付近で南北半球対の低気圧性循環偏差となった。対流圏下層では、太平洋熱帯域の西部で南北半球

対の高気圧性循環偏差、南インド洋熱帯域の中部～東部、フィリピンの北東海上で低気圧性循環偏差となった。海面気圧は、熱帯域では、太平洋中部～東部で正偏差、インド洋中部～インドネシア付近で負偏差となった。南方振動指数は+1.7だった。

世界の天候

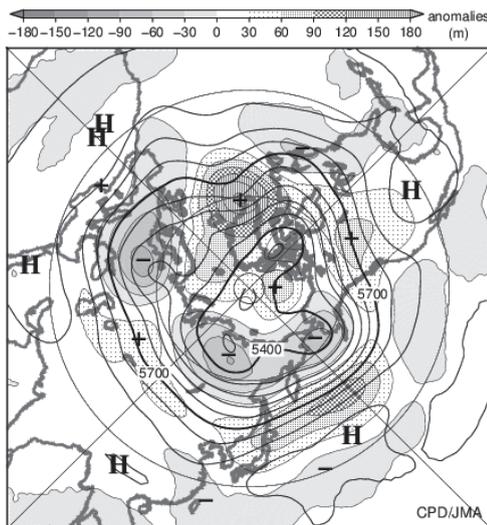
世界の月平均気温偏差は+0.29℃(速報値)で、1891年の統計開始以降、9月として6番目に高い値となった。9月の世界の平均気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は約0.68℃/100年(速報値)である。

主な異常天候発生地域は次のとおり。

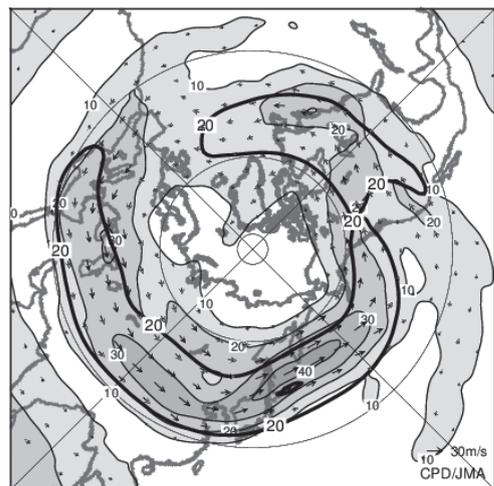
- 東アジア北部～中央アジア、地中海西部周辺、米国西部、メラネシア南部～インドネシア南部で異常高温、スラウェシ島～カリマンタン島、ロシア西部～ヨーロッパ東部、ブラジル南部～アルゼンチン北部で異常低温となった。
 - インドシナ半島～ジャワ島、ヨーロッパ中部で異常多雨、中国南東部、カナダ中部～米国南部、ブラジル南部～アルゼンチン東部で異常少雨となった。
- (気象庁 大気海洋部 気候情報課)

※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ「気候系監視速報」をご覧ください。

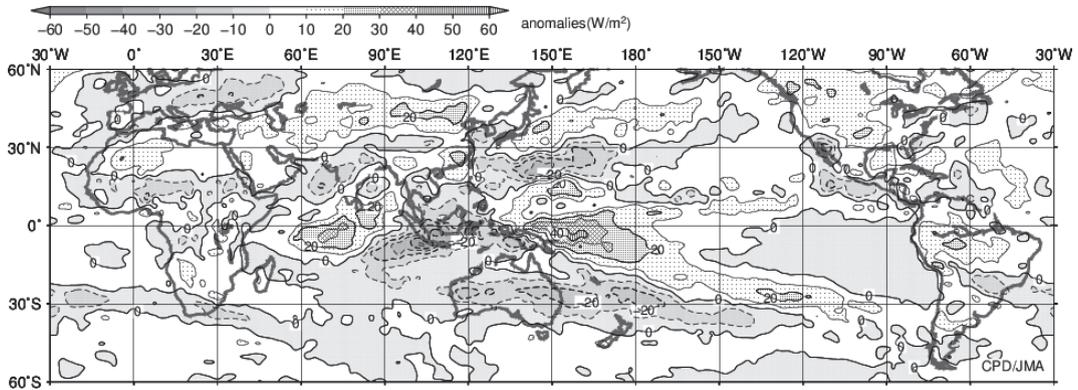
<https://www.data.jma.go.jp/cpd/diag/sokuho/index.html>



2022年9月の北半球月平均500hPa 高度及び
 平年偏差
 等値線間隔は60m。陰影は平年偏差。平年値は
 1991～2020年の平均値。

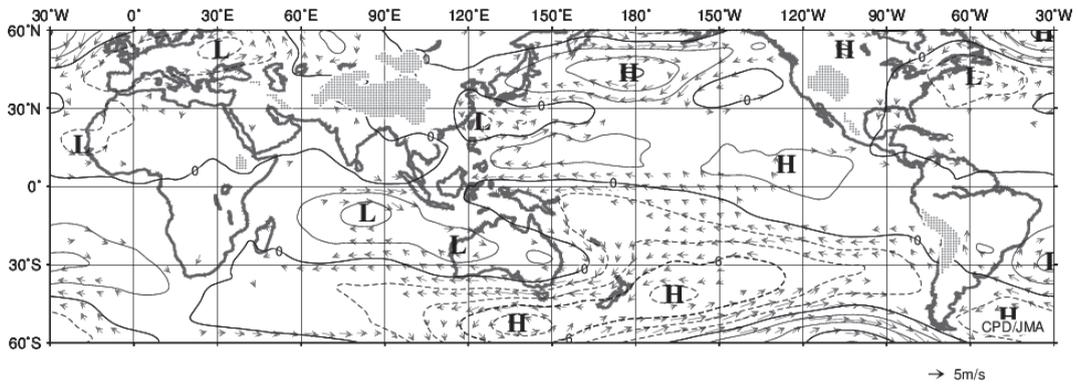


2022年9月の北半球月平均200hPa 風速及び
 風ベクトル
 等値線間隔は10m/s。太実線は平年の風速で等値
 線間隔は20m/s。平年値は1991～2020年の平均値。



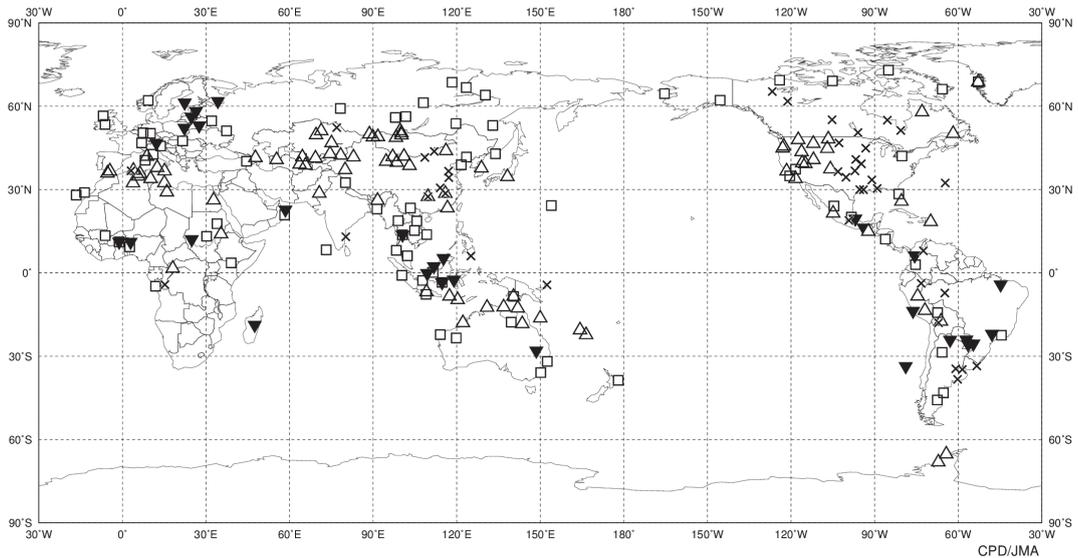
2022年9月の月平均外向き長波放射量年偏差

等値線間隔は 10W/m^2 で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。米国海洋大気庁 (NOAA) より提供されたデータを用いて作成。年偏差は1991~2020年の平均値。



2022年9月の月平均850hPa 流線関数年偏差及び風年偏差ベクトル

流線関数の偏差の等値線間隔は $2 \times 10^6\text{m}^2/\text{s}$ 。年偏差は1991~2020年の平均値。



2022年9月の世界の異常天候分布図 △異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨
異常高温・低温は標準偏差の1.83倍を超える場合、異常多雨・少雨は降水5分位値が6及び0。